

Title	形容詞の形容動詞化と形容動詞の形容詞化
Author(s)	蜂矢, 真郷
Citation	語文. 2001, 75-76, p. 12-19
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68972">https://hdl.handle.net/11094/68972</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 形容詞の形容動詞化と形容動詞の形容詞化

蜂 矢 真 郷

形容詞語幹が接尾辞を伴って形容動詞語幹を構成することがある。これを、仮に形容詞の形容動詞化と呼ぶことにする。「形容詞の」と呼ぶことも「形容動詞化」と呼ぶことも、それぞれ「語幹」と示さない点で正確な表現ではないが、便宜上このように呼んでおく。

ここに、接尾辞ゲを末尾に持つ形容動詞語幹をゲ型語幹と呼ぶことにするが、形容詞語幹が接尾辞を伴って構成される形容動詞語幹には、まずゲ型語幹がある。ゲ型語幹の語基の全てが形容詞語幹である訳ではないが、形容詞語幹であるものが大部分を占める。<sup>(1)</sup>例は多く、源氏物語に見えるものだけでも次のようである。<sup>(2)</sup>(複合形容詞などの一部を「〜」と略して示すことがある)。

(〜)フカゲ「深」、ミジカゲ「短」、ウルサゲ「煩」、(〜)カタゲ「難」、ラウタゲ、ネブタゲ「睡」、(〜)イタゲ「痛・甚」、メダタゲ、ネタゲ「妬」、ウシロメタゲ、(〜)ナゲ「無」、〜ナゲ「甚」、(〜)ラサナゲ「幼」、キタナゲ「穢」、(〜)スクナゲ「少」、(〜)セバゲ「狭」、ツラゲ、(〜)ヨワゲ「弱」、モノウゲ「憂」、(〜)ニクゲ「憎」、(〜)ヤスゲ「安」、アツゲ「暑」、アヤフゲ「危」、シブゲ「渋」、(〜)サムゲ「寒」、タユゲ「弛」、マバユゲ「眩」、

(〜)スゴゲ「凄」、カシコゲ「賢・畏」、(〜)ココロボソゲ「心細」、イザトゲ「寢隠」、ケウトゲ「気疎」、タフトゲ「尊」、(〜)トホゲ「遠」、クチオモゲ「口重」、(〜)ヨゲ「良」、(〜)ツヨゲ「強」、(〜)キヨゲ「清」、カロゲ「軽」、ツユケゲ「露」、トロセゲ「所狭」、ウタテゲ「転」、シフネゲ「執念」、ナメゲ「無礼」(以上、ク活用形容詞語幹十ゲ)

(〜)アシゲ「悪」、サカシゲ「賢」、カカヤカシゲ「嚇」、(〜)サワガシゲ「騒」、ナツカシゲ「懐」、(〜)ハツカシゲ「恥」、(〜)ムツカシゲ、ユカシゲ、イソガシゲ「忙」、(〜)ヲカシゲ、(〜)ナゲカシゲ「歎」、〜メカシゲ、ハラダタシゲ「腹立」、(〜)ワタダシゲ「慌」、オモダタシゲ「面立」、(〜)カナシゲ「悲」、カタクナシゲ「頑」、〜ガハシゲ、ニツカハシゲ「似附」、ニギハハシゲ「賑」、アナヅラハシゲ「悔」、ワヅラハシゲ「煩」、マギラハシゲ「紛」、ソシラハシゲ「誘」、ウルハシゲ「麗」、モノオモハシゲ「物思」、タダヨハシゲ「漂」、ウケハシゲ「詛」、〜マジゲ、〜ガマシゲ、アサマシゲ、スサマシゲ、メザマシゲ「目覚」、ナヤマシゲ「悩」、アラマシゲ「荒」、ツツマシゲ「慎」、ムツマシゲ「睦」、ウトマシゲ「疎」、(〜)コノマシゲ「好」、アヤシゲ「奇」、クヤシゲ「悔」、アラアラシゲ「荒荒」、アタラシ

ゲ「可憎」、ホコラシゲ「誇」、サウザウシゲ「寂」、ウツクシゲ、スズシゲ「涼」、ユエシゲ、( )クルシゲ「苦」、カドカドシゲ「才」、タドタドシゲ「逶迤」、コトゴトシゲ「事事」、モノシゲ、モノモノシゲ、ホシゲ「欲」、マホシゲ、イトホシゲ、タノモシゲ「頼」、オソロシゲ「恐」、ヨロシゲ「宜」、( )ヲシゲ「惜」、ツキツキシゲ、( )サビシゲ「寂」、ワビシゲ「佗」、ウヒウヒシゲ「初初」、イミジゲ、カケカケシゲ「懸懸」、( )ウラメシゲ「恨」、ナレナレシゲ「馴馴」、ハレバレシゲ「晴晴」、ウレシゲ「嬉」、ホレボレシゲ「惚惚」、ユエユエシゲ「故故」

(以上、シク活用形容詞語幹十ゲ)

ク活用形容詞語幹のものも、シク活用形容詞語幹のものも多く見え、むしろ後者の方がより多い。また、複合形容詞語幹のものもかなり見える。従って、形容詞語幹が三音節以上のものも当然多いことになる。と言うよりも、それが一・二音節のものはより少ない。あるいは、ナゲ「無」・ヨゲ「良」のように、それが一音節のものがあることが、むしろ注意される。

接尾辞ゲを伴うことは、中古の和文における形容詞の形容動詞化のかなり一般的な方法であったと見られる。ただ、訓点資料におけるゲ型語幹の例は極めて少ない。<sup>(3)</sup>

## 二

接尾辞カを末尾に持つ形容動詞語幹をカ型語幹と、ヤカ(ヨカを含む)を末尾に持つそれをヤカ型語幹と、ラカ(ロカを含む)を末尾に持つそれをラカ型語幹とそれぞれ呼んで、ヤカ型語幹・ラカ型語幹をカ型語幹に含まないこととし、これらを合わせ呼ぶ際にカ

(・ヤ・カラカ) 型語幹と呼ぶことにするが、形容詞語幹が接尾辞を伴って構成される形容動詞語幹には、右に見たゲ型語幹の他にカ(・ヤカ・ラカ) 型語幹がある。なお、カ(・ヤカ・ラカ) 型語幹の語基は、形容詞語幹のものもそうでないものもある。

この場合に、形容詞語幹が伴う接尾辞は何であるかが些か問題になる。カ型語幹は接尾辞カを伴うものであるが、ヤカ型語幹は、接尾辞ヤを伴いさらに接尾辞カを伴うとらえられるもの(本来型)と、肥大した接尾辞ヤカを伴うとらえられるもの(応用型)とがあり、ラカ型語幹は、接尾辞ラを伴いさらに接尾辞カを伴うとらえられるもの(本来型)と、肥大した接尾辞ラカを伴うとらえられるもの(応用型)とがある。よって、ヤカ型語幹・ラカ型語幹については、本来型と応用型とを分けて挙げることにする。

具体的な用例は基本的に以前に挙げたので、ここには比較的古い例の出典のみを示すことにする。ゲ型語幹と異なり、和文に偏ることとはない。以下に見るように、ク活用形容詞語幹のものが多く、シク活用形容詞語幹のものには○印を付しておいた。

### (1) カ型語幹 (形容詞語幹十カ)

ヤスカ「ウシロヤスカ」(宇津保物語・吹上上<sup>(7)</sup>)、ユルカ(名義抄)<sup>(8)</sup>、シルカ(狭衣物語)、クボカ(新撰字鏡)、マロカ(節用集・易林本) / ヤフサカ(書院部藏論語四嘉曆二年点) / ◇マサシカ(古今著聞集三三一)

### (2) ヤカ型語幹 (本来型) (形容詞語幹十ヤ)十カ

ワカヤカ(山田嘉造氏旧藏弥勒上生経貫平安初期点)、ナゴヤカ(東大寺諷誦文稿)、ニコヤカ(新撰字鏡)、ニコヨカ(萬四三〇九)

### (3) 同 (応用型) (形容詞語幹十ヤカ)

タカヤカ(蜻蛉日記)、ナガヤカ(山田嘉造氏旧蔵弥勒上生経贊平安初期点)、チカヤカ(源氏物語・初音)、ユルヤカ(運歩色葉集)、ホソヤカ(山田嘉造氏旧蔵弥勒上生経贊平安初期点)、トホヤカ(夜の寢覺)、クボヤカ(今昔物語集二十八5)、オモヤカ(名語記)、キヨヤカ(日葡辞書・補遺)、カロヤカ(太平記・三大森彦七事)、アラヤカ(枕草子)／ミジカヤカ(采花物語十二)、チヒサヤカ(落窪物語)、スクナヤカ(昔の衣三)、ミニクヤカ(源氏物語・浮舟)、ハシタナヤカ(同・夕顔)／ヨラカシヤカ(同・少女)、ヨロシヤカ(浜松中納言物語)、オトナシヤカ(保元物語)、マコトシヤカ(曾我物語)、イカメシヤカ(飯・太閤記七秀吉四国退治之事)

(4) ラカ型語幹(本来型)〈形容詞語幹十ラ〉十カ

アカラカ(山田嘉造氏旧蔵弥勒上生経贊平安初期点)、タカラカ(落窪物語)、アサラカ(萬二九六六)、カタラカ(続後紀承和三年五月宣命)、コハラカ(平家物語<sup>二九七八</sup>)、ハヤラカ(宇治拾遺物語)、ニクラカ(源氏物語・若菜上)、ヤスラカ(山田嘉造氏旧蔵弥勒上生経贊平安初期点)、ウスラカ(宇津保物語・国譲上)、アツラカ〔厚〕(同・同)、カルラカ(蜻蛉日記)、ユルラカ(落窪物語)、ホソラカ(名語記)、オホラカ〔多〕(讀岐典侍日記)、トホラカ(今昔物語集十六21)、オモラカ(狭衣物語)、キヨラカ(宇津保物語・嵯峨の院)、カロラカ(源氏物語・夕顔)、マロラカ(同・宿木)、クロラカ(宇津保物語・葦開上)、シロラカ(堤中納言物語)、ヒロラカ(今昔物語集二十八23)／\*アララカ〔粗〕(蜻蛉日記)、\*アララカ〔荒〕(源氏物語・帯木)、\*クララカ(讀岐典侍日記)、\*シララカ(名義抄)

(5) 同(応用型)〈形容詞語幹十ラカ〉

ワカラカ(大鏡)、アララカ(倭玉篇・慶長十五年刊本)、ヒキラカ(宇治拾遺物語)／ミジカラカ(平家物語)、チヒサラカ(とはずがたり)、オホキラカ(平家物語)／オトナシラカ(平治物語・古活字本)、マコトシラカ(幸若舞曲・堀川夜討)

ク活用形容詞語幹のものとシク活用形容詞語幹のものとを斜線で分け、前者について形容詞語幹が二音節のものと三音節以上のものとを斜線で分けておいた。また、今一つ(4)において斜線で分けておいたものに、\*印を付したものがあつた。これは、一部重複形状言十カ(9)の構成のカ型語幹ととらえられるものであるが、ラカ型語幹(本来型)ととらえることもできるので、そのようにとらえた場合として、このように挙げておいた。

右に、(5)ヒキラカ(宇治拾遺物語)を挙げたのに対して、ヒキヤカ(今昔物語集二十三21)を挙げなかつた。また、(5)オホキラカ(平家物語)を挙げたのに対して、オホキヤカ(宇津保物語・吹上上)を挙げなかつた。これらの扱いについては、稿を改めて述べることにしたい。

本来型である(2)・(4)のものには、シク活用形容詞語幹のものが見えず、形容詞語幹が三音節以上のもが見えない。(1)～(5)を通して、二音節のク活用形容詞語幹のものが多く、これが基本であると思られる。さらに、(1)～(5)を通して、形容詞語幹が一音節のものが見えない。これらの点は、第一節に見たゲ型語幹の場合に、ク活用形容詞語幹のものもシク活用形容詞語幹のものも多く見え、形容詞語幹が三音節以上のものも多く、さらにそれが一音節のものがあつたと、大きく異なることになる。カ(・ヤカ・ラカ)型語幹のもの

例もかなり多いけれども、ゲ型語幹に比して制限的であると言える。また、ゲ型語幹は上代に見えないのに対し、カ(ヤカ・ラカ)型語幹は例は少ないが上代に見えるという差違もある。

その他、(1)のカ型語幹の例は多くない。ヤカ型語幹である(2)・(3)の例、ラカ型語幹である(4)・(5)の例は、いずれもかなり見えるが、後者ラカ型語幹の例の方が前者ヤカ型語幹の例より多く見える。形容詞語幹が接尾辞ヲを伴う用法を持っているのに対して、それが接尾辞ヤを伴うものは少ないので、その差がラカ型語幹とヤカ型語幹との差にも現れたものと考えられる。

そして、形容詞語幹が接尾辞ヤを伴うものの一つであるところの(2)ヤカ型語幹(本来型)の例は少ない。ナゴヤカに対して、ナゴヤ「…なごやが下に(奈胡也我下丹)…」(萬五二四)の例は見えるが、形容詞ナゴシ「鶏ニドの声ニドなど、さまざま和ニドうきこえたり」(蜻蛉日記)が用いられる例は少ないようである。ニコヤカ・ニコヨカに対して、ニコヤ「…柔ニドやが下に(余古夜賀斯多余)…」(記神代・五)の例は見えるが、形容詞ニコシ「毛乃和支物毛乃荒支物」(祝詞・広瀬大忌祭・九条本)が用いられる例はさらに少ないようである。また、ワカヤカに対して、ワカヤ「水ニド葉ニド稚ニド之(神功前紀・熱田本)の例がないではないが、むしろ、ワカヤカが本来型として認められるのは、動詞ワカユ「弥ニド若ニド觀ニド御ニド若ニド觀ニド坐ニド」(祝詞・出雲国造神賀詞・九条本)の例の見えることよって(13)。

(3)ヤカ型語幹(応用型)のものは、多くが応用型の中の直接型のものであると見られる。すなわち、応用型の中の肥大的代入型(14)のものはクボヤカ(今昔物語集)のみであり、同じく交替的代入型(16)のものはユルヤカ(運歩色葉集)・キヨヤカ(日葡辞書・補遺)・カロヤ

カ(太平記二十三森彦七事)と時代の下るもののみである。

ヤカ型語幹の肥大的代入型(14)のものは、カ型語幹とヤカ型語幹とが語基を共通にし、かつ、カ型語幹の接尾辞カにヤカを代入するように形成されたと見られることでもできるものであるが、(1)形容詞語幹十カのものが多いと、その結果として(1)の語基と(3)のそれとが共通するものが少ないと考えられる。

また、ヤカ型語幹の交替的代入型(15)のものは、ヤカ型語幹とラカ型語幹とが語基を共通にし、かつ、ラカ型語幹からラカをヤカに代えることよって形成されたと見られるものであるが、語基が形容詞語幹のものは、形容詞語幹が接尾辞ヲを伴う用法を持っていることにより、むしろ、同じくヤカ型語幹からヤカをラカに代えることよって形成されたと見られるところのラカ型語幹の交替的代入型の方が構成力が強いようである。

そして、(5)ラカ型語幹(応用型)のものは、応用型の中の交替的代入型のものばかりと見られる(18)。

因みに、(4)は「形容詞語幹十ラ」十カ(17)の構成であるが、それに関連して、形容詞語幹十ラのものも形容動詞語幹を構成するので、例は多くないようであるが、次に挙げておく。

アカラニ「脣口ニドは赤ニドラに」(西大寺藏金光明最勝王經平安初期点・春日政治氏釈文)、ウマラニ「…うまらに(宇麻良尙)聞しもち食せ…」(記応神・四八)、ヤスラニ「…小頸ニド安ニドらに(己久比也須良尙)…」(催馬楽四・夏引)、サムラニ「和たへの衣寒らに(服寒等丹)…」(萬一八〇〇)、キヨラナリ「装束の清ニドらなること」(竹取物語)、ヒロラニ「御ニド横ニド刀ニド廣ニド尙ニド誅ニド堅ニド女」(祝詞・出雲国造神賀詞・九条本)◇サカシラニ「さかしらに夏は人ま

ね…(古今一〇四七)、◇モノガナシラニ…:もの悲しらにへ物  
悲良尔(思へりし…)(萬七二三)、◇ワビシラニ…秋の虫何侘び  
しらに(へ侘芝良丹)こゑのする…(新撰萬葉集三七四)、◇ウ  
レシラナリ「世尊の身の支は…:光り悦シラなり」(山田嘉造氏旧藏  
七三六)

弥勒上生経贊平安初期点・中田祝夫 築島裕氏釈文)

二の例も、右のキヨラナリ・ウレシラナリの例やサカシラナリ  
(落窪物語)の例があるので、ナリ活用の連用形と見てよいであら  
うか。シク活用形容詞語幹のものは、右に見えるのに対して、(4)に  
は見えない(5)には見える)ので、右のものに対して(4)は制限的であ  
るとも言えよう。

### 三

第一節・第二節に見た形容詞の形容動詞化に対して、形容動詞語  
幹が接尾辞を伴って形容詞を構成することがある。これを、仮に形  
容動詞の形容詞化と呼ぶことにする。「形容動詞の」と呼ぶことは、  
「語幹」と示さない点でこれも正確な表現ではないが、便宜上この  
ように呼んでおく。

ケシを末尾に持つク活用形容詞をケシ型形容詞と呼ぶが、形容動  
詞語幹が接尾辞を伴って構成される形容詞には、ケシ型形容詞があ  
る。ケシ型形容詞のうち、カ(・ヤカ・ラカ)型語幹との対応を持  
つものを一次的ケシ型と、その対応を持たないものを二次的ケシ型  
と呼ぶが、形容動詞の形容詞化に当たるのは一次的ケシ型であり、  
それが大部分を占める。

その場合に、ケシ型形容詞のケの甲乙が知られるものはいずれも  
乙類であるところから、この構成はカ(・ヤカ・ラカ)型語幹+i+

シのように示されることがある。ケシ型形容詞の語幹は、語幹の用  
法があまり顕著でなく、サヤケサ「:音のさやけさ(於止乃佐也計  
左)」(催馬楽三三・真金吹く)・ハルケサ「:みちのはるけさ」  
(土左日記)などのように接尾辞サを伴うものが見えることや、イ  
ササケワザ「なほしもえあらで、いさくわざせさす」(同)・アハ  
ツケビト「あはつけ人だに、寢覚しぬべき空の気色を」(源氏物語・  
夕霧)のように下の名詞と複合するものが若干見えることぐらいで  
あるが、それでも語幹の用法が全く見えない訳ではないので、これ  
を形容詞語幹として切り出してみることにすると、形容動詞語幹が  
接尾辞iを伴って形容詞語幹を構成するとも言つてもよい。

これも、具体的な用例は基本的に以前に挙げたので、ここには比  
較的古い例の出典のみを示すことにする。

- (a) サダケシ(平中物語)、ユタケシ(萬四三六二)、コマケシ(新  
撰字鏡)、サヤケシ(萬三三三四)、ケヤケシ(源氏物語・胡蝶、  
ヒラケシ「ツバヒラケシ・ツマビラケシ」(天理図書館蔵金剛波若經  
集驗記平安初期点)、シツケシ(萬三八八)、ハルケシ(萬三  
九八八)、ユルケシ(堀河百首七)、カソケシ(萬四二九)、ノ  
ドケシ(古今八四)、タシケシ(萬四〇九四)ノイサケシ(推  
古紀十二年・岩崎本平安中期点、アタタケシ(新撰字鏡・享和  
本)、アハツケシ(源氏物語・空蝶)、オゴソケシ(山田嘉造氏旧藏  
弥勒上生経贊平安初期点)
- (b) サハヤケシ(新撰字鏡・群書類従本)、ナハヤケシ(新撰字鏡)、  
コマヤケシ(石山寺蔵大般涅槃經九平安中期点)、ニコヤケシ(新  
撰字鏡)、タラヤケシ(加茂保憲女集・序)、スミヤケシ(興聖寺  
藏大唐西域記十二平安中期点)・スムヤケシ(萬三七四八)、ヒハ

ヤケシ(新撰字鏡)

(c)アカラケシ(記応神・四二)、アザラケシ(仁徳前紀・前田本)、ヤハラケシ(字鏡)、ヤスラケシ(祝詞・大殿祭・卜部兼永本)、アキラケシ(萬四四六六)、タヒラケシ(萬四四〇八)、ナビラケシ(新撰字鏡)、ナメラケシ(同)、ソソロケシ(新訳華嚴經音義私記)

(a)はカ型語幹と対応するもの、(b)はヤカ型語幹と対応するもの、(c)はラカ型語幹と対応するものである。その際に、カスカーカソケシ、スミヤカースミヤケシ・スムヤケシ、へへヤカーヒへヤケシはその対応の中に母音交替を含むものである。

右のように、ケシ型形容詞のもののはかなりの例が見えて、形容動詞の形容詞化としてある程度一般的な方法かと思われるが、カ(ヤカ・ラカ)型語幹十ナリの形容動詞の方がケシ型形容詞よりよく用いられることによつて、この形成は平安後期以降衰えて行く。

#### 四

形容詞の形容動詞化の上に形容動詞の形容詞化が重なることがある。つまり、形容詞の形容動詞化によつて形成されたところの形容動詞がさらに形容詞化されることがある。

アカシ(伊勢物語)→アカラカ(山田嘉造氏旧藏弥勒上生経贊平安初期点)→アカラケシ(記応神・四二)

ヤスシ(記允恭・七八)→ヤスラカ(山田嘉造氏旧藏弥勒上生経贊平安初期点)→ヤスラケシ(祝詞・大殿祭・卜部兼永本)

のような「形容詞語幹十ラ」十カ十i十シの構成のケシ型形容詞アカラケシ・ヤスラケシがそれである。これらは、アカ(シ)→アカ

ラカ、ヤス(シ)→ヤスラカの形成が第二節に見た形容詞の形容動詞化に当たり、アカラカ→アカラケシ、ヤスラカ→ヤスラケシの形成が第三節に見た形容動詞の形容詞化に当たる。それぞれの例の見える時代に拘わらず、理論的にこのようであると言える。今一つ、

ユルシ(皇極紀四年六月・岩崎本平安中期点)→ユルカ(名義抄)→ユルケシ(堀河百首七)

のような「形容詞語幹十カ」十i十シの構成と見られそうなケシ型形容詞ユルケシがあるが、以前に述べたように、形容詞ユルシから形成された二次的ケシ型形容詞ユルケシから、カ(ヤカ・ラカ)型語幹とケシ型形容詞との対応との類推によつてユルカが形成されたこととえられるので、形成の順序としては異なることになる。

つまり、形成の順序を考慮すると、形容詞の形容動詞化の上に形容動詞の形容詞化が重なるものは(4)「形容詞語幹十ラ」十カの形容動詞語幹のもののみに見えることになるが、ケシ型形容詞が主に見えるところの平安中期以前の形容動詞語幹の例を見ると、(1)⑤の中では(4)がアカラカ・タカラカ・アサラカ・カタラカ・ヤスラカ・ウスラカ・アツラカ「厚」・カルラカ・ユルラカ・キヨラカ・クロラカ・シロラカ(およびアララカ「粗」と最も例が多いので、当然の傾向と言えることになる。

他方、逆に、形容動詞の形容詞化の上に形容詞の形容動詞化が重なること、つまり、形容動詞の形容詞化によつて形成されたところの形容詞がさらに形容動詞化されることは、ないようである。「カ(ヤカ・ラカ)型語幹十i」十ゲの構成のゲ型語幹が見えるならば、第三節に見た形容動詞の形容詞化の上に第一節に見た形容詞の形容動詞化が重なるものになるが、望月郁子氏「形容動詞と形容詞の語

形の変遷について<sup>(20)</sup>が「カ型を持つ場合には、カ型を持つことはない」と指摘されるように、一次的ケシ型形容詞語幹「カ・ヤカ・ラカ」型語幹<sup>(1)</sup>は、接尾辞ゲを伴うことがない。尤も、などかうは選けずには給へる（宇津保物語・国譲下）

まことにいとほるけずなり（落窪物語）

のようなハルケゲの例があるとされることはあるが、いずれも本文に問題のあるところであり、宇津保物語の例ははつきりしないが、落窪物語の例は恐らくハルケゲの誤りではないかと見られる。なお望月氏は、「カ型はカ型と重なっては存在しない」とされて、カ（ヤカ・ラカ）型語幹<sup>(1)</sup>の形がありにくいことも指摘されているが、アタタカゲ（宇津保物語・俊蔭、源氏物語・未摘花）、ハルカゲ（枕草子、栄花物語<sup>(2)</sup>）、ノドカゲ（栄花物語<sup>(2)</sup>、<sup>(11)</sup>）などが<sup>(30)</sup>が見える。これらのことについては、別に稿を改めて今少し詳しく述べることにしたい。

また、これに対して二次的ケシ型形容詞語幹は、ムクツケゲ（竹取物語、蜻蛉日記、枕草子、堤中納言物語）、ツユケゲ（源氏物語・夕顔）、シホドケゲ（夜の寝覚、狭衣物語、栄花物語<sup>(2)</sup>）のように接尾辞ゲを伴うことがあるが、二次的ケシ型形容詞の形成は形容動詞の形容詞化に当たらないので、形容詞の形容動詞化の上に形容動詞の形容詞化が重なるものとは言えない。

以上、本稿は、形容詞語幹が接尾辞を伴って形容動詞語幹を構成すること、および、形容動詞語幹が接尾辞を伴って形容詞（語幹）を構成すること、ならびに、両者の重なり具合について、すなわち、形容詞語幹と形容動詞語幹との相互の派生関係について見た。

注

(1) 柄澤明子氏「中古物語文学における形容動詞の語構成について」（中央大学国文）27〔1985・8〕、漆谷広樹氏「形容動詞・語幹構成要素の『カ』に関する一考察」（専修国文）42〔1988・2〕、村田菜穂子氏「ゲナリ型形容動詞——造語力拡大の様相について——」（国語語彙史の研究）18〔1989・3、和泉書院〕など参照。

(2) 補助動詞マジ・マホシ+接尾辞ゲのものを含む。

(3) 築島裕氏「平安時代の漢文訓読説語につきての研究」〔1983〕東京大学出版会第二章第三節七参照。威・嚴・トシテ肅・然ニマシマス。『石山寺藏大唐西域記長寛元年点・中田祝大氏釈文』などの例が僅かに見える。

(4) 前稿[A]「ヤカ型語幹の構成」（ことばとことば）8〔1981・12〕。「カ型語幹の構成」（国語語彙史の研究）17〔1988・8、和泉書院〕。「ラカ型語幹の構成」（森重先生「国語語幹」7中古語の研究）1988・4。「ヤカ型語幹とラカ型語幹」（国語語幹7中古語の研究）1988・2。明治書院。(5) ヤク（ヤク）・ラク（ラク）（国語語彙史の研究）18〔前掲〕。(6) カ・ヤカ・ラカ型語幹の語基（『同』19〔2000・3、和泉書院〕）および、別稿（『語構成と形状言』（語文）大阪大学）65〔1996・2〕。(7) 「複合形状言・派生形状言」（国語語彙史の研究）16〔1986・10、和泉書院〕では、カ型語幹・ヤカ型語幹・ラカ型語幹のそれぞれについて考える必要などから、カ・ヤカ・ラカ型語幹と呼び、また、前稿[A]（『形容詞語幹十カ・ヤカ・ラカ』（『研究年報』奈良女子大学文学部）32〔1989・3〕）(8) 「十カの一形態——語基末がイ列、エ列の場合——」（『国語』16〔1988・10〕）および、前稿[B]（『ケン・カシイ・カイ』（『同志社国語学論集』1983・5、和泉書院））(9) 『アキラケシイ——ケシ・カシイ・カイ統考——』（帝塚山学院大学日本文学研究）18〔1987・2〕(10) 『カ・ク・ケシ』（『叙説』14〔1987・10〕）(11) 『カ・ク・ケシ』（『国語語彙史の研究』14〔1986・8、和泉書院〕）では、後に挙げるケシ型形容詞との関係を考える必要などから、ヤカ型語幹・ラカ型語幹を合せてカ型語幹と呼んで、統一的に呼ばないままであったが、両者の問題を考慮して、改めてカ（ヤカ・ラカ）型語幹と呼ぶことにしたい。

(5) 前稿[A]（『同』(3)・(4)・(6)内参照。

(6) 前稿[A]（『同』(3)・(4)および(6)。

(7) ヤスカ（宇津保物語・吹上上）として挙げた例は、ウシロヤスカの形で用いられているが、前稿[A]内に述べたように、カ型語幹の語基は他に四音節以上のもが見えないので、ヤスカとして挙げることにする。



(8) 後に第四節(注28)箇所 でユルシ・ユルカ・ユルケンについて述べる箇所参照。

(9) アララカ「粗」・アララカ「荒」は、縮重複形状言十カの構成のカ型語幹ととらえることもできる。前掲[A]参照。なお、縮重複形状言・一部重複形状言については、「国語重複語の語構成論的研究」[1984・4]増書房「第三篇第一・二章参照。

(10) 前掲[A]参照。なお、ユルルカ(蜻蛉日記)は、一部重複形状言十カの構成のカ型語幹ととらえられるものであるが、ラカ型語幹ではないので、ここには挙げていない。

(11) 統稿(一)「形容詞ヒキシ・オホキイ等とその周辺」(『日本語学と言語学』[2001・10]明治書院、予定)

(12) 橋本四郎氏「ク活用形容詞とシク活用形容詞」(『橋本四郎論文集』国語学編[1984・12]角川書店)もと、「女子大国文」5 [1957・3]、「上代語概説」(『時代別国語大辞典上代編』第三章四の「形容詞」の項)「第三章は主として浅見徹・橋本四郎執筆、松村明氏編」(『日本文学大辞典』の「形容詞」の項(山口佳紀氏執筆)など、および、別稿(三)「形容詞語幹の用法」(井手至先生著、国語国文学漢[1989・12]和泉書院)参照。

(13) 前掲[A]参照。

(14) 前掲[A]・(一)・(三)・(四)参照。

(15) 前掲[A]・(三)参照。前掲[A]・(二)で「代入型」と呼んだものに当たる。

(16) 前掲[A]・(三)参照。前掲[A]をも参照。

(17) このヤカ型語幹の例は基本的に(2)・(3)に挙げた。また、(2)・(3)に挙げていないヒキヤカ・オホキヤカについては統稿(一)に見る。

(18) 前掲[A]・(三)参照。

(19) 前掲[B]・(一)・(三)参照。但し、ケが甲類のタケシ「武」を含まない。

(20) 前掲[B]参照。後に注(31)に挙げた統稿(二)をも参照。

(21) タケシ「武」をケシ型形容詞に含まないのはこのことによる。

(22) 森山隆氏「上代における連母音 [ai] の転化について」(『上代国語の研究——首韻と表記の諸問題——』[1986・11]桜楓社)もと「国語学」28 [1987・3]、山崎馨氏「形容詞助動詞の研究」[1982・2]和泉書院「前篇第一・三・五章(それぞれ、もと「美夫君志」6 [1963・6]、『研究資料日本文法』3用言編[1984・10]明治書院)」「武蔵野文学」22 [1974・12]、川端善明氏「活用の研究」II第二部第五章「1979・2」大修館書店、1997・4増補再版「清文堂出版」)山口佳紀氏「古代日本語文法の成立の研究」[1985・1]有精堂「第二章第二七節(もと「国語と国文学」58—5 [1981・

二) など、など参照。

(23) 前掲[B]・(一)

(24) ヒラケシとして挙げた例は、ツバヒラケシ・ツマビラケシの形で用いられているが、前掲[A]に述べたように、対応するツバヒラカ・ツマビラカはツバ・ツマ+ヒラカの構成と見られて、前掲[A]内に述べたように、ラカ型語幹ではなくカ型語幹と対応するとの見方がよいと考えられる。

(25) ユルケシと対応するユルカは、ユルケシが第四節(注28)箇所)に述べるように形成されたものであるけれども、ユルカ・ユルケシの対応を持つことになるので、また、オゴソケシと対応するオゴソカは、前掲[A]に見たようにソカ型語幹と見られるが、ソカ型語幹の例は少ないので、それぞれ便宜上カ型語幹に括弧おく。

(26) 後に見る望月郁子氏論文(注29)箇所)は、アカシーアカラカアアカラケシの他に、ケシーケヤカアケケシを挙げられるように見えるが、ケシはシク活用であるのでケシのケは形容詞語幹ではなく、また、ケヤカはケヤ十カ構成と見るのがよいと考えられる(前掲[A]・(一)ので、ここには挙げてない。

(27) 前掲[A]・(一)

(28) ユルカ(名義抄)が存在するにも拘わらず、ユルヤカ(連歩色葉集)を、第二節でヤカ型語幹の肥大的代入型ではなく交替的代入型ととらえたのは、このことによる。

(29) 『日本文学誌要』13 [1965・11]

(30) 異本の例を含めると、ハナヤカゲサ(源氏物語・総合・保坂本)、ニホヒヤカゲサ(同・胡蝶・大島本)、ウララカゲサ(同・初音・肖柏本他)、フクラカゲサ(紫式部日記・宝永本)のようなくケサの形の例が見える(前掲[B]参照)。

(31) 統稿(二)「二次的ケシ型と二次的ケシ型」(『国語学叢史の研究』20 [2001・2]和泉書院、予定)

キーワード・形容詞語幹 形容詞語幹 ゲ型語幹

カ(ヤカ・ラカ)型語幹 ケシ型形容詞

—— 本学大学院教授 ——